

コミュニケーションツールとは

- 神経難病の患者さんの中には、病気の進行とともに、手足の自由がきかないために文字を書くことや、上手に話すことが難しくなってくる方がいらっしゃいます。
- そんな時に意思疎通（コミュニケーション）をサポートする方法として、コミュニケーションツールがあります。
- たとえば、うまく話すことができないためにスマートフォンやタブレット端末を利用することもその一つですし、以前から使われてきた文字盤も、立派なコミュニケーションツールです。

当院での取り組み

- 患者さんの尊厳を保ちつつ療養していただくために、お互いの意思疎通が必須です。そのため、発症早期からコミュニケーション手段の情報提供や、実際に体験いただくことを積極的に行なっています。
- 多職種（医師、看護師、作業療法士、言語聴覚士、理学療法士、医療ソーシャルワーカー等）によるシームレスな介入を行なっています。
- 入院患者さんに対して、リハビリの一環として各種コミュニケーションツール（透明文字盤、コミュニケーションボード、iPad、伝の心、TCスキャン、オリヒメ、Miyasuku、マイボイス等々）のお試しをいただいています。一度にたくさんの種類が試せるので、好評です。

実際の導入例

ALSの50歳代男性。発症以前から、スマートフォンを使ってLINEで家族や知人と連絡をとっていました。

呂律困難や手のうごかしにくさによりスマートフォン操作が困難となってきたため、主治医・病棟看護師より担当リハビリに相談しました。

作業療法士が細かく要望を聴取し、医療ソーシャルワーカーと協力して、LINEが使える意思伝達装置のデモを実施しました。

医療ソーシャルワーカーより申請についてご家族に説明してもらい、公的補助を受けて装置を導入しました。

その後も病状の進行に合わせて、理学療法士による操作姿勢の検討や、作業療法士による機器の設定見直しを繰り返し行いました。



コミュニケーションツール導入の流れ

当院での導入をご希望の場合、2～4週間程度の入院をしていただきます。

①ヒアリング, 評価

何をしたいかご希望を伺い、使用目的を明確にしていきます
体のどの部分がどの程度動かせるか（身体機能）をチェックします

②コミュニケーションツールの選定（1週間程度）

どこで、どんな姿勢で使うのか（環境設定）も確認します

③デモ（1～2週間程度）

実際の機器を使い、操作を安定して行えるか
評価していきます

④決定, 申請

機器の給付申請をご家族に行っていただきます
医療ソーシャルワーカーがお手伝いします

⑤導入後

症状が進行してもコミュニケーションツールが
使い続けられるように、機器や姿勢の調整を行います



こんな時にご相談ください

- ✓ 字が書きにくくなったり喋りにくくなったりして、意思を伝えるのに困難を感じる。
- ✓ これまで使ってきたスマホやタブレットが操作しにくくなってきた。
- ✓ 気管切開や気管切開下人工呼吸器装着を考えているが、「自分の声」を残したい。
- ✓ これまでスイッチで意思伝達装置を使ってきたが、スイッチが難しくなってきたため、視線入力に切り替えたい。
- ✓ すでに意志伝達装置や透明文字盤等を利用しているが、最新の意思伝達装置を試してみたい。

